

学生と地域が連携した棚田再生 ～京丹後市袖志地区での取り組みから～

堀江 亮平

1. はじめに

筆者は、自身の出身地でもある京都府京丹後市丹後町にて、研究活動としてフィールドワークを行っている。その中で、地域社会に生起する具体的な公共問題として、袖志地区において少子高齢化や農業の担い手不足に伴い、地区のシンボルでもある棚田において休耕田の増加が明らかになった。加えて、その美しい棚田を再生・保全したいとの想いを抱いている方が数多く存在することがわかった。

そこで、筆者は学生と地域の協働型実践プロジェクトとして「袖志の棚田再生プロジェクト」を実施した。本年度はプロジェクトの進行に当たり、「学び」や「交流」の視点を重視し、従来袖志の棚田で行われてきた事業とは異なるアプローチを展開した。ソーシャル・イノベーション研究コースにおける社会実験の中間報告として、本稿にて報告する。

2. 京丹後市丹後町袖志と棚田

京丹後市丹後町袖志¹は京都府の最北端、経ヶ岬灯台の麓にある半農半漁の営みが残る集落である。そこには山陰海岸ジオパーク²の最東端に位置する、日本海に面した美しい棚田がある。自然とくらしが一体となったその棚田の魅力は、日本の棚田百選³やドラマの舞台⁴として、

人々に発信されている。同時に、それは袖志人々にとって象徴であり、誇りでもある。

しかし、集落の少子高齢化に伴う過疎化の進行、農業の担い手不足が顕著になり、現在棚田の約15%が休耕田となった。行政も棚田保全に関する事業を展開しているが、具体的な解決策として機能しているとはいえない。

3. 袖志の棚田再生プロジェクト

以上の様な現状を受け、袖志の棚田再生プロジェクト⁵が実施された。本プロジェクトは、「みんなで再生～袖志の棚田を未来へ～」を合言葉とした、産学官民の協働による袖志の休耕田再生事業である。多くのステイクホルダーが持ち味を出し合い、休耕田を再生し、その美しい風景を未来の子どもたちに伝承しようという主旨のもと開始された。

今年度は企画・運営にあたり、2つのことに重点を置いた。1つは、交流・体験を通して保全意識の向上を図ることである。すでに述べたように、袖志の棚田は住民にとっての「くらし」の側面と、一方で地域外の人々にとっての「観賞」の側面がある。地元住民の方々は「観賞」の側面のみにスポットライトが当たること、すなわち「くらし」が忘れ去られ、棚田への関心の割に保全への関心が低いことに疑問を抱いている。そこで、本プロジェクトにおいて交流・

¹ 京丹後市丹後町袖志は人口219人、世帯数93戸、高齢化率35%（2010年5月現在）。農林水産省主催の第7回美しい日本のむら景観コンテストにおいて「むらづくり対策推進本部長賞」、また同省主催の「美しい日本のむら景観百選」を受賞した。現在、袖志には約四百枚の美しい棚田がある。

² 2010年10月7日に山陰海岸ジオパークは世界ジオパークに認定された。

³ 1999年に農林水産省が全国117市町村・134地区の棚田を「日本の棚田百選」に選出した。

⁴ NHKドラマ「オトンの宝物」の舞台として有名である。

⁵ 『袖志の棚田再生プロジェクト』ウェブサイト<http://sodeshinotanada.web.fc2.com/>

体験を重視し、棚田に内在する人々の「くらし」を学ぶことで、保全に対する意識の向上が期待できるのではないかと考えた。2つは、都市と農村の複合的なネットワークの構築である。1つの地域に1つのゼミというような固定的な形式をとるのではなく、参加者の門戸を広げ垣根を下げ、1つの地域に対して様々な大学や団体が関係をもつ。それにより、ネットワーク型の都市農村交流のモデルを構築できれば、事業の継続性に寄与できるのではないかと考えた。こうした意向を反映した結果、今年度は7回の取組にのべ約150人の参加があった(表1参照)。

なお、全ての参加者について、参加費は無料だが、交通費や宿泊費等、参加にかかる費用は全て個人負担であった。また、本プロジェクトをより多くの方に知っていただけるよう、ウェブサイトを作成し、筆者が運営した。この実践プロジェクトは宇川連合区の助成を受けて行われた。

4. 企画から実施まで

本プロジェクトの企画は、筆者と猪俣一雄⁶が主体となり、企画の叩き台を作成し、袖志の平井区長はじめ袖志区の方々との打ち合わせを経て意思決定を下し、実施に至った。

正式なプロジェクト参画への要請を行ったのは2010年4月19日である。「厳しいかもしれなあ」猪俣氏と不安を口にしながら、猪俣氏の車で袖志の集会所に向かった。というのも、企画案は、学生と地域との協働で休耕田を再生し米づくりを行うものであったのだが、学生は田植えや稲刈り等のイベント程度しか参加できないため、日常の田の管理はすべて袖志の方々をお願いすることになる。地域にとって本プロジェクトへの参画の決断は負担と責任を負うことになるのだ。冒頭の言葉は、筆者と猪俣氏の正直な想いだった。

会場につくと、平井区長はじめ、袖志区の世話役の方々が合計6人いた。「なんせ急だわ」打ち合わせが始まるや否やその言葉が室内に響

いた。袖志区では田植えの準備や段取りはすでに終了しており、今から田植えの話をするには言語道断の上、さらに休耕田を再度興すには筆者たちの予想以上に、多くの人手と労力が必要だとのことだった。筆者と猪俣氏が現実を噛み締めていると、「そういえば、あっこの田はどうなってるだ」と何気ない一言から、棚田の所有者の話になった。それを皮切りに状況が一転した。「あそこは今市内(京都市内)にいるで」「久しぶりに連絡してみるか」「どうせならあこの角の田がえーわや⁷」などと徐々に議論が活発化し、前向きになり、具体性を帯びてきた。棚田の話になると息がつく暇がない。ついには、進行役の平井区長が「それどこだいな⁸」といってホワイトボードに棚田全体の見取り図を描き出す。その後も議論は白熱し、「そういうことなら、皆さん、この流れですし、やるということでもいいですか」平井区長の言葉に全員が小刻みに首を縦に振った。こうして、袖志区のプロジェクトの参画が正式に決定し、プロジェクトが本格的に走り出した。

5. 2010年度の取り組みから

今年度再生することになった休耕田は2枚の棚田、のべ面積約8アールである。持ち主は現在袖志に在住の方ではなかったため、袖志の方が連絡を取り再生する許可をとって下さった。また、米はもち米のみを植えることになり、同時に秋の収穫祭では餅つき大会⁹やもち米粉パンを作成することが決定した。

2010年度の取り組みは、表1にまとめた通りである。すべての取り組みにおいて共通していることが2つある。まず、講師は地域の人々であった。とりわけ、女性の講師陣は回を増すごとに増加していった。大学生にとって、講師は自分の祖父祖母と同世代の方である。ぬかるんだ田の中を俊敏に動き、鎌を巧みに操るその姿に、「おお」「すごい」と参加者は驚きを隠せなかった。特に、今回の取り組みは全行程を手作業で行ったため、若者には不慣れなことが多

⁶ 猪俣氏は宇川温泉よし野の里に勤務。丹後の資源を活用した体験型ツアーを企画・運営している。猪俣氏は、以前から京丹後のシンボルでもある袖志の棚田を再生できないかと考えられていた。

⁷ 「どうせならあこの角の田がえーわや」は「もしするのならあこの角の田がいいだろう」の意味。

⁸ 「それどこだいな」は「それはどこの田のことを言っているんだ」の意味。

⁹ 餅つき大会は集落の方々が用意してくれた木製の杵と臼を使用して行なった。地域にある道具・技術、そしてその伝承の重要性を感じる機会にもなった。

く、「すごっ」「はやっ」「うまっ」どこから学生の声が飛び交っていた。

次に、交流である。袖志の棚田を舞台に、新しい出会いがあった。地域内外の地域住民と学生出合いはもちろん、大学を超えた学生同士の出会いもそうである。特徴的なことは、プロジェクト毎に、常に新しい参加者がいたことだ。「初めまして」と不安そうに自己紹介をしていた学生も「僕だけ初めてで不安だったけど、地域の方が温かかったからすぐにとけ込むことができた」と語っている。そうした場を維持した結果、「今回は〇〇さんいないの？」といった声が地域の方々や学生から聞かれるようになった。毎回参加が叶わないものもいるが、袖志の棚田という場でつながっている。「第二のふるさとのようです」収穫祭でそう話した学生がいたが、それには迎えてくれる地域の人々の存在はもちろん、そこで学生同士の出会いや再会があることも寄与しているのではないだろうか。

6. 成果と展望

2010年度の取り組みで再生できた棚田は休耕田全体の3%にすぎない。しかし、今年度は前節に記した通り、その数字以上のものを得ることができた。参加者は、地域の講師から棚田再生を通して集落の文化や技術、すなわち「くらし」を学ぶことができた。地域の方々は、参加者に指導することで日常に埋もれていた景観・技術・言葉等、地域の価値を再認識することができた。「孫のような学生さんと作業するのは楽しい。また来てくれるのを楽しみに、秋まで元気にしとります。」80代の現役講師、東氏の言葉からは、その学びが「生きがい」になったとも感じられる¹³。また同市在住の長砂健は「地元に素晴らしいものがあることがわかった。このことを子どもたちに伝えたい。」と語ってくれた¹⁴。また交流が仲間を作り、学びを深めた。特に収穫祭では、京丹後市をフィールドに活動する6大学の学生が初めて顔を会わせ、共に汗を流し交流を深める場となった。これによ

表1 2010年度の取組内容（※2010年7月3日の取組は雨天中止）

開催日	内 容	場 所	参加人数	参加者
5月8日	田植え（手植え）交流会	袖志の棚田、宇川温泉よし野の里	約35人	袖志住民、京都教育大学、京都女子大学、同志社大学、地元の若者
7月3日	草刈り 水管理	袖志の棚田、宇川温泉よし野の里	約20人	袖志住民、京都教育大学、同志社大学、京丹後市
9月11日	稲刈り（手刈り、稲木干し）交流会	袖志の棚田、はしうど荘	約30人	袖志住民、京都教育大学、立命館大学、同志社大学、地元の若者
11月6日	収穫祭（餅つき、米粉パン作り等）交流会	袖志の棚田、袖志農民研修所、宇川温泉よし野の里	約60人	袖志住民、京都教育大学、京都工芸繊維大学、京都精華大学、京都大学、同志社大学、立命館大学、地元の若者
11月7日	京丹後まちづくり交流フォーラム ¹⁰ にて事例報告	宇川温泉よし野の里 2F大広間	4人	平井袖志区長、同志社大学、京都教育大学
11月28日	遠むすびプロジェクト ¹¹ にてもち米販売、パネル展示	新風館	7人	同志社大学、京都教育大学、京都精華大学
12月12日	棚田フォーラム ¹² にて事例報告	セントラーレホテル京丹後	未 定	未 定

¹⁰ 京丹後まちづくり交流フォーラムは筆者がソーシャル・イノベーション研究コースの社会実験の1つとして企画・実施し、京丹後市をフィールドに研究活動や社会貢献活動を行う全9団体が参加し、活動報告やワークショップを行った。

¹¹ 『遠むすびプロジェクト』ウェブサイト <http://enmsb.blog135.fc2.com/>

¹² 丹後棚田研究会が企画する「棚田フォーラム」にて事例報告を行う予定である。

¹³ 収穫祭で郷土料理や餅つきの講師を務めたご婦人方からは「翌日ほどよい疲労感があった」「私らも最近はこんなことせんで楽しかった。」という声も聞かれた。

¹⁴ 長砂氏は筆者の同級生で、現在は京丹後市にて小学校教員をしている。都市部の大学生だけでなく、こうした地域の担い手になりうる地元の若者が参画していることが本プロジェクトの特徴である。

¹⁵ 現在、京丹後市にはふるさと支援活動の4大学や京丹後市と提携を結ぶ京都工芸繊維大学等、京都府下の多くの大学が研究活動や社会貢献活動を行っている。しかし、それらが情報交換や連携を行う機会は存在しなかった。今回の交流をきっかけとし、大学を超えた連携の動きが始まりつつある。



図1 田植えの様子 (西村仁志撮影)



図2 稲刈り時の集合写真 (猪俣一雄撮影)



図3 もちつき大会の様子 (筆者撮影)



図4 収穫祭の様子 (臼井華子撮影)

り、今後、京丹後で活動する学生のプラットフォームの役割を本プロジェクトが担うことも期待できる¹⁵。

以上の様に、今年度は休耕田再生を通じた交流がネットワークを産み、体験が「場の教育」(岩崎・高野, 2010)を産み地域の人々の自信や誇りを再生した。渥美は実践的研究に触れる中で、「実践とは、日常生活をおくる人々の認識や行動に何らかの、通常は、ポジティブな変化を及ぼすこと。」(渥美, 2007)と論じている。本年度再生できたものはなにより、人々の自信や誇りかもしれない。「ありがとう」「来年もまってるからな」と口にするようになった地域の人々と共に、引き続きプロジェクトを進めていく。

参考文献

- 岩崎正弥・高野孝子『場の教育「土地に根ざす学び」の水脈』
農村漁村文化協会, 2010年, p29
小泉潤二・志水宏吉編書『実践的研究のすすめ 人間科学の

リアリティー』有斐閣, 2007年, p71

参考ウェブサイト: (2010年12月8日閲覧)

- 農林水産省 美しい日本のむら景観コンテスト (京都府)
http://www.maff.go.jp/j/nousin/noukei/binosato/b_utukusiimura/b_utukusiimura/todoufuken/kyoto/pdf/tango.pdf
農林水産省 美しい日本のむら景観百選
http://www.maff.go.jp/j/nousin/noukei/binosato/b_hyakusen/pdf/kyoto.pdf
農林水産省 日本の棚田百選
<http://www.acres.or.jp/Acres20030602/tanada/100selectmap/kyouto.html>
京丹後市
<http://www.city.kyotango.kyoto.jp/index.html>
山陰海岸ジオパークウェブサイト
<http://sanin-geo.jp/>
袖志の棚田再生プロジェクトウェブサイト
<http://sodeshinotanada.web.fc2.com/>